法華寺旧境内の調査

―第412・414・417次

1　第412次調査

本調査は個人住宅の建て替えにともなう発掘調査である。調査地は法華寺町内で、法華寺旧境内の東南隅にあたる。調査面積は54㎡で、調査期間は2006年８月23日から31日までである。

現地表面の標高は62.2ｍで、表土や宅地造成土を除去すると、標高61.2ｍ付近で遺構面に達する。

検出遺構

調査区の東側で南北方向の溝を２条、北側で東西方向の溝を１条、調査区南端で土坑を１基検出した。

SF9060　二条条間北小路である。南側はやや傾斜しているが、後世の削平によるものである。調査区内で南側溝が検出されていないことから、その道路幅は５ｍ以上と推定される。

SD9061　東西方向の素堀の溝で、幅0.7～1.1ｍ、深さは現状で20～30㎝である。二条条間北小路の北側溝にあたる。東端はSD9065に接続している。調査区中程で北に開口部を持つようで、法華寺旧境内から排水溝などの施設が接続していた可能性が高い。

SD9065　南北方向の素堀りの溝で、西側の肩のみを確認した。その位置から東二坊大路の西側溝と推定される。深さは20～30cmで、上層にはほぼ同じ位置に中世の溝（SD9066）が確認された。

SD9067　SD9065のすぐ西側に位置する南北溝で、幅約１ｍ、深さは20cmである。その性格は不明だが、SF9060の敷設までには埋没しており、敷設の際に上部が削平されたと考えられる。

SK9063　調査区南端に位置する近世以降の土坑。中からは下駄や網代編みの竹籠などが出土した。

出土遺物

SD9067からは6231B（大官大寺式）や6641C・E・F（藤原宮式）がまとまって出土した。法華寺周辺から6231Bが出土したのは初めてである。また、SD9061からは杓子や籌木らしい加工棒が７点出土している。SD9065からはガラス小玉の鋳型や炉壁、羽口が出土した。

（林正憲）

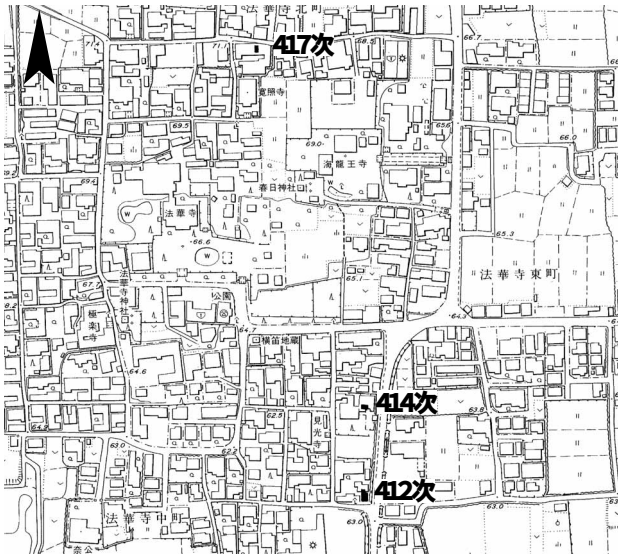

図203　各調査区位置図　１：6000

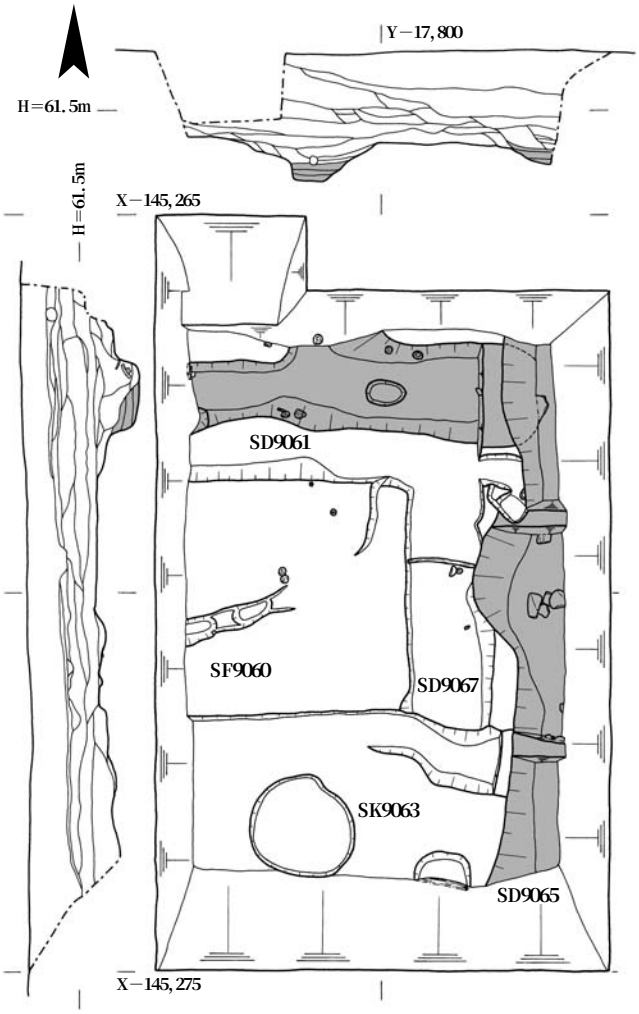

図204　第412次調査区遺構平面図・断面図　１：100

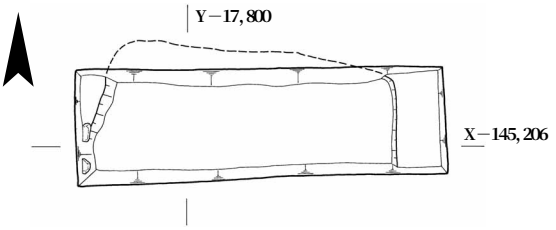

図205　第414次調査区遺構平面図　1：100

2　第414次調査

個人住宅新築に伴う調査で、2006年10月12日に開始し、10月16日に終了した。調査区は東西５m、南北1.５m、7.5㎡を設定した。

地表下0.7～１mで青白色の地山を確認した。調査区中央で、東西幅約４mの土坑状遺構を検出し、埋土からは江戸から明治期にかけての瓦・土器・木製品や木屑が出土した。調査終了時に調査区北壁が若干崩壊し、調査区の北約40㎝で、土坑状遺構の北壁を確認し、壁面で幅１m、深さ10㎝～20㎝程度の溝を確認した。（島田敏男）

3　第417次調査

調査地は、奈良市法華寺町909番の一部にあり、平城京条坊では、左京一条二坊の一条条間路推定地にあたる。本調査は、個人住宅建設に伴う事前調査として実施したもので、調査面積は９㎡（南北4.5m×東西２m）、調査期間は、2006年11月13日から11月16日までである。

調査知見

基本層序は、地表面から、盛土（約20㎝）、暗茶色土（約15～25㎝）、茶褐色土（約10㎝）、礫混黄褐色粘質土（地山）である。

SD9075　茶褐色土を除去した後、礫混黄褐色粘質土の地山で検出した。南北2.7m以上、深さ約１m。調査区の東西にさらに延びる。深さ約0.5mで段掘りがみられ、溝心の幅約1.5m分が深くなっている。一条条間路の北側溝と推定できる。溝上層の黄灰白色粘質土から軒平瓦(6721E)１点、溝上層・下層からそれぞれ型式不明の軒丸瓦各１点が出土した。

SK9076　東西２m以上、南北1.2mの土坑。近代以降の土坑と考えられるが、土坑底の灰白色砂質土から、軒平瓦(6679B)が１点出土した。（山本　崇）

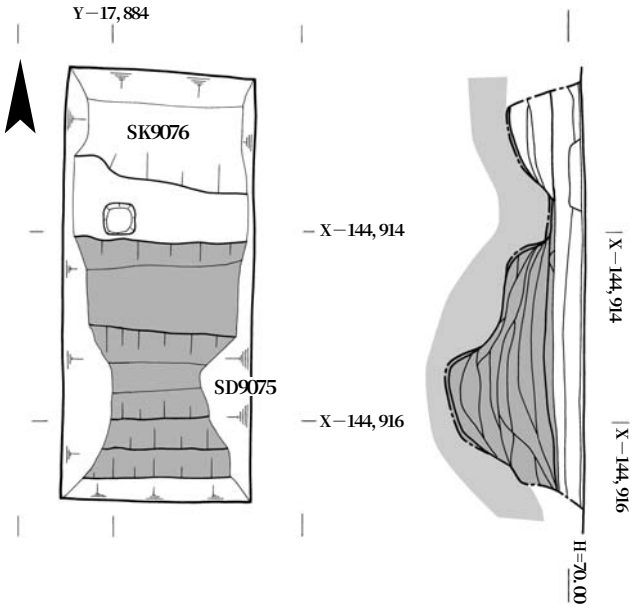

図206　第417次調査遺構図・東壁土層断面図　1：80

遺　物

SD9075からコンテナ３箱分の土器が出土したが、その多くは上層（黄灰色砂・明茶灰色砂質土より上位）から出土したものである。９世紀前半の土師器・須恵器杯が多いものの、10世紀前半の土師器杯A・灰釉皿を含み、溝の埋没が10世紀に降ることを示す。下層の土器は少なく、10世紀の土器は認められない。瓦磚類は、SD9075を中心に合計60kg前後出土した。（森川　実）

まとめ

本調査では、一条条間路の北側溝と推定できる溝を検出した。平城京左京地域、とくに法華寺周辺の条坊道路の様相を検討する上で基礎的なデータを得たといえる。

（山本）

図207　SD9075（北西から）